

「こりゃあ大変だぞ。宋の小娘のところを遼の將軍が来てるとはな。それも、あれはかなり上の將軍だ。りっぱななりしてやがった。話は聞こえんかったが、親しそうにはしてたな」

李吉は思わぬものを拾ったと、心の中でほくそ笑んだ。格別用事があつて宋家村に来たのではない。ふだんは太原府の瓦子※で、とぐろを巻いて遊び呆けているだけだった。遊ぶ金がなくなり、宋家村に働きの口を捜しに来ただけだ。浪子※仲間から、宋家村に行けば何がしかの仕事があると聞いていた。金払いもいいと聞いている。だから金がなくなった時、すぐに宋家村に行こうと思った。おまけに、宋家の跡取り娘は桃花のように美しいと聞いていた。村に来たついでに、その娘も見えてやろうと門から覗いていたら、遼將と話す娘を見てしまったのだった。

※瓦子 繁華街

※浪子 遊び人・粹人

「李吉よ落ち着くんぞ。よく考えろ。こんな小さな村に遼の將軍が来るなんてことは、どう考えてもおかしいぞ。こりゃあ何か裏がある」

李吉は、これがどうしたら金になるかと考えた。宋家村は遼との交易で潤っている。そんなことは近隣の者なら誰でも知っている。権場でもきちんと税を納めているらしいし、悶着を起こしたとも聞いていない。禁制品の絹を扱っているとは聞いていたが、そんなものはどこかの商人も扱っているし、宋も遼も黙認している。うるさいのは塩と銅、そして火薬くらいのものだ。銅は、遼ではあまり採れないので歓迎されている。遼銭の鑄造に銅を必要としているのだ。今はまだ、遼の中でも宋銭の方が求められている。これに目をつけて、宋の商人は塩、茶の他に宋銭を取り扱う者が多かった。宋家村ではそうした噂を聞かない。そこらの商人より、よほど真つ当な商売をしているらしかった。

「そうだ。大戸※の魯權が宋家の小娘を煙たがっていたな」

こういうことには李吉の頭はよく回る。滅多にない幸運だった。一番高く売れそうなところに情報を持って行く。李吉は踊るような足取

りで太原府に戻って行った。

※大戸 有力者

「呉乞買、何か儂に言いたいことでもあるのか。遠慮なく言うてみよ」いきなり阿骨打が後ろを振り返った。呉乞買は一瞬口を開こうとしたが、黙って顔を俯けた。

「おまえと儂は兄弟ではないか。隠すことはないぞ。おまえの考えていることくらい儂には分かる」

呉乞買は、弦の切れた弓を深い谷に捨てた。宋家村を発つてそろそろ五刻になる。道は峠にさしかかり、陽も西に傾いている。この峠を越すと小さな鎮市※がある。陽が落ちるまでに、そこまで辿り着かねばならなかった。

※鎮市 新興の交易都市

「まだ黙っておるのか。まあ、もともとおまえは無口な方だからな。兄弟とはいえ、儂は話し好きだしな。儂とおまえ、合わせて分ければちようどよいのかもしれないな。おお、長兄の烏雅束も話し好きだな」というと、我が完顔の家系は口の軽い家系ということか」

「兄者と上の兄者は違う」

「ようやく口を開いてくれたか。あまり黙っているので心配したぞ。呉乞買、何か心があるのだろうか」

「兄者、からかっているのか」

「まさか。おまえは儂の右腕だ。おまえの武を儂は頼りにしておる。目と耳は今日見つけた。いや、あれは頭だな。儂の鈍い頭に代わって、きっと正しい道を選んでくれるだろう」

呉乞買は小さくため息をついた。

「呉乞買、おまえ宋雪華に惚れたな」

呉乞買は顔を赤らめて、何か言い返そうとしたが、言葉にはならなかった。

「よいのだ、呉乞買。あれほどの娘、女真にも遼にもおらん。儂だっでもう少し若ければ惚れておったかもしれない。おまえは儂よりも若いし妻帯もしておらん。あの娘に惚れて当然だ。儂は聞起に出会い、若いながら大した奴よと感心した。そして、聞起が心酔しておった宋雪

華という娘にどうしても会いたくなかった。聞起の語る以上の娘だった。嬉しい驚きと言ったところか」

「それなら、どうしてあんな試しを」

「飛鏢のことか。おまえにはまだ話しておらんかったか。儂はな、若い頃宋を旅したことがあつてな、ある時、侠きやくにからまれたのだ。おまえも知つての通り、宋では侠の繋がりつながりは侮れん。何がもとの諍しやういだつたかははっきりせんが、とにかく儂は揉め事に巻き込まれ、二十人ほどの侠きやくに囲まれた。宋人のすべてが軟弱と思つてはならんぞ。宋が武を軽んじるのは王朝を維持するためなのだ。宋の太祖趙匡胤たいてい、せちほうきやういんは武力で国を建てた。次の太宗趙匡義たいせう、ちやうきやうぎは弟だ。武で建てた国は武で滅ぶ。二人はそう思つておつたのだらう。武を一つのみにし、皇帝の下にか置かなかつたのだ。国を脅かす武は持たせない。それが宋という国の根幹だ。だから、宋で武力を有すると言えるのは禁軍きんぐんだけなのだ。地方には廂軍しやうぐんを置いておるが、これは戦うことなぞ出来ん。おそらく宋という国は、外からの脅威より内からの崩壊を怖れておるのだ。廂軍の兵数があれだけ多いのも、仕事にあぶれ不満をいだく者を取り込んで、国に対する反抗心を削ぐためなのだ。むしろ、廂軍より民兵の方が質は高い。四十年ほど前に王安石の行った新法改革が、今でも地方では生きておる。開封府では、王安石のことなぞとうに忘れ去つておるわ。」

※ 侠 義で繋がった市井の男伊達。武を中心とした者達を武侠という

※ 禁軍 宋中央軍 ※ 廂軍 地方軍

「侠との諍いはどうになりました」

「ある飯店で、俠達が酒を飲みながら擲色てきしやくの話で盛り上がつておつた。儂は博打ぼくちが嫌いだし、うるさくてかなわんかったので席を替えようとしたのだ。するとどういふわけか侠の一人がからんできた。どうして避けるのか、とな。擲色に負けて虫の居所が悪かつたのだらう。どう弁解しても聞いてくれん。飯店の主は、どうしていいか分からずおろおろするばかりでな。他の俠達も酒の勢いで儂を取り囲み、罵声を浴びせかけてきおつた。荒事は避けられんかと観念し、劍に手をか

けた時、二人の男が入って来た。一人は小柄だががっしりとした五十がらみの男で、一分の隙もないほど精気に溢れておった。もう一人は二十台の男で、理知的な涼やかな目をしておった。おお、そう言えば宋雪華の目は父譲りだのう。宋江の目は、しっかり娘に受け継がれておる」

※擲色　さいころ賭博

「若い男が宋雪華の父だったのですね」

「そうだ、もう一人は祖父の宋湛だ。二人は飯店に入ると、何事が起きていたのだと主に尋ね、仲裁に乗り出してくれたのだ。はじめは興奮がおさまらなかつた俠達も、焦れた宋江が飛鏢を飛ばすのを見て息を呑んだ。その神技に驚いたのだ。宋湛も、一人を大勢で囲むなど俠の心意気に反すると説いた。宋湛が名を明かすと、俠達は平伏して従った。その頃江湖※では、その飛鏢の腕とともに、宋湛の名は伝説的なものになっておった。話はまとまり、俠達は儂に詫びを入れ、儂も礼を失したことを謝った。それから儂は、二人を尊敬し親しくなったのだ。もう二十年も前のことだ。十年ほど前からは会っておらんかったから、おまえが知らぬのは仕方がない」

※江湖　俠の社会

「それで兄者は、宋家村を襲った賊を追いかけたのですね。聞起から宋家村の話聞いた時、なぜ兄者があんなに激怒したのか、今の話を聞いて腑に落ちました」

「あの宋江が賊の手にかかるとはな。あの時儂は、聞起達のためではなく、儂自信のために奴らを討とうと思ったのだ」

「草頭の阿里奇達を逃がしましたが」

「わざと逃がしたのだ。儂とおまえがすべて片付けてしまつたら、聞起達に申し訳なからう。阿里奇のことを知つたうえでどう出るかは、あの者達それぞれが決めることだ。儂らの口出しすることではない」

「阿里奇は、本当に太原府にありますかな」

「おる。儂が古くから親しくしておつた宋の商人、蔣唐しやうとうを知っておるな。聞起の話聞いてから、儂は蔣唐に太原府に行くように頼んでおいたのだ。宋側から賊の情報をつかむのと、もう一つは曹瑛という娘を助けるためにだ。娘一人で太原府のような大きな城郭で商売をして

おるのだ、何かと面倒も多かるう。そんな時のために、蒋唐にかけながら助けてやってくれと話しておったのだ。蒋唐は、娘の隣に家を借りておる。今ではすっかり気に入り、自分の娘のように可愛がっておる。この曹瑛という娘も美しいらしいぞ。そのうえ、凄まじく頭がきれるらしい。蒋唐は神算子と綽名しておる。その蒋唐が阿里奇を見張っておるのだ」

「それで蒋唐は、あんなに頻繁に兄者のもとへ」

「そればかりではないがな。宋の内情も探らせておる。特に、河北の威勝をな」

「威勝といえは、田虎」

「そうだ、その田虎だ」

「三万人もの私兵を集め、何やら物騒なことを企んでいると噂されていますが」

「田虎が動いた時が、儂らの立つ時になるかもしれん」

「なるほど、河北は遼に近い」

「そういうことだ。そして、そのくらいは宋雪華も読んでおる。蒋唐よりも遥かに正確な時を報せてくれるだろう。儂らには女真の命運が託されておる。つまりくことは出来んのだ」

「それで、あの者達を仲間にと」

「それだけではない。儂はな、宋雪華に会ってみたかったのだ。友であつた宋江の娘にな。宋江の奴、素晴らしい娘を遺しおったわ。これでは恥ずかしくて、儂の子らなぞ見せれんわ」

「兄者の息子、娘だつてよいところは沢山ありますぞ」

「宋雪華とは比べものにならん。おまえだつてそう思っておるはずだ」

「それは……」

「まあよい。おまえがあんな娘に惚れるのは当然だ。だがな、宋雪華は難しいぞ。おそらく、惚れたはれたなどの気持ちは持たんように思う。

あんな目に遭つておるからな」

「いいのです。心の中にしまっておきます」

「そうか呉乞買、よい漢になったのう」

二人は笑いながら夕暮れの中に溶けていった。

「李吉という者が、御主人様に話があると云っておりますが」

「李吉、聞かぬ名だな」

魯權は不機嫌そうに家宰かさいの方を見た。

「どのような風体だ」

「あまり上等では。浪子の仲間かと」

「そのような者に関りはないがな」

「何やら重大な報せがあるとのこと、会えるまで帰らぬと言っております」

「そうか、仕方ないな。面倒なことにならぬよう、少し話してみるか」

魯權が前序に着くと、裕あわせの前をはだけた貧相な男が拝礼していた。

「私が魯權ですが、何か用でもございますか。手短にお聞かせ願えますか」

男は顔を上げ、もう一度魯權に礼を執った。抜け目のない目をしておる。魯權はそう思った。

「あつしは李吉と申しやす。西門の坊に住んでおりやす。とっておきの話を仕込んでまいりやした。是非とも聞いていただきたいと思いまして」

李吉の口元は媚を売るように歪んでいたが、魯權を見る目は笑っていないかった。魯權は、油断はならぬと身構えた。

「おっとお大尽、悪い話じゃござんせん」

「何のお話ですかな」

「お大尽にとっちゃ、いい話かと」

「聞いてみなくては、よい話かどうかは分かりません」

「とっておきですぜ。偶然仕込んだ話でさあ。それなりの……」

魯權は込み上げる怒りを抑えた。こんなことで一々怒っていては、商売など成り立たない。くだらないと思っても一応は聞いておく。玉石混交のそんな雑多な情報の積み重ねが、今の自分を作ったことを忘れてはいない。魯權は作り笑いを浮かべた。

「それはもう。話の中身によってですが」

李吉はほつとしたように大きな溜息をついた。度胸はないらしい。魯權は、少し警戒を緩めた。

「中に入りますか」

こういう手合いとの交渉では、なるべく自らの手の内に取り込んでしまう。長年の経験から学んだ魯權の処世術であった。

「ここで結構でさあ。他に人もいねえようだし」

魯權は心の中で笑った。人はいる。私の右隣に。おまえからは見えぬように、塀のかけにな。家宰の丁洪ていこうは腕が立つ。素手でも剣でも、おまえなど一瞬のうちに倒してしまいうだろう。おまえ達浪子に一人で会うほど、私は愚かではない。

「それでは、話していただくのでしょうか」

「宋家村のことですか」

魯權は少し嫌な顔をした。聞きたくない村の名だった。つい三月ほど前、魯權は宋家村に向いている。保正と称する娘と会い、遼との交易に一枚かませてもらおうとしたのだ。魯權の商売は宋内がほとんどで、遼は手薄の状態だった。しかし商売を拡げるには、他国との交易は不可欠と思われた。そこで目をつけたのが宋家村だった。賊に襲われ壊滅的な被害を受けたが、死んだ保正の娘が継いで、あつという間に復興を果たしたということだった。どうやら賊にもかなりの死傷者が出て、財物は強奪を逃れたらしかった。その財物を売り払い、それを元手に遼との交易をはじめたらしい。一年もせず交易は軌道に乗り、その利で村の復興を果たしたという。近頃は、西夏にまで手を伸ばしているらしい。

魯權は保正の娘を手なづけて宋家村に食い込み、やがては交易路を乗っ取るつもりだった。太原府を任せられている曹瑛という娘にわたりをつけ、何度目かの交渉の末、宋雪華という保正の娘に会った。宋雪華はその端正な容貌かおに似合わず、手厳しく提携を拒絶した。魯權のことを調べ上げたとき、利を貪り私腹を肥やしていると糾弾した。

その激しさに、同行していた丁洪が思わず腰を浮かせかけたが、宋雪華の後ろに控えていた黒い大男に一睨みされて腰を落とした。魯權は激しい怒りと屈辱を味わった。しかし外面だけは穏やかに、仕方ありませんなどと笑って見せた。諦めたわけではない。機会はあるはずだ。なければ作ればいい。魯權は何の成果も得ず宋家村を後にした。それ以来、宋家村のことは思い出すのも苦痛だった。その宋家村についての耳寄りな情報だと……。

魯權は胸の高鳴りを覚えた。

「宋家村のどんなお話ですか」

魯權は、冷静を装いつつ言った。

「とっておきの情報ですぜ、魯大尽」

魯權は少し焦れてきた。李吉は出来るだけ値を吊り上げようとしている。その手には乗りたくないが、他ならぬ宋家村のことだった。

「それでは前金として」

魯權は後ろを振り向き、奥にいた小者に命じて銭を持って来させた。

「さすがは魯大尽」

李吉は紐で繋がれた銅銭の重みを確かめると、急に滑らかに話し出した。

「昨日あつしは、何か日請け仕事でもないかと思いやして、ふらつと宋家村に出向いたんでさあ。あいにく仕事が見つからなかったんで、せっかくここまで来たんだ、ひとつ評判の保正の娘でも見てやろうと思ひ立ち、保正の館まで行ったんですよ。するってえと、前庭の門が開いていて前庁の方が見えたんで、慌てて門のかげに隠れました」

「何が見えました」

「遼兵が二人。いや、あれはかなり上の將軍って感じだった。その二人が、笑いながら保正の娘と話してたんでさあ」

「確かに保正の娘だったんですね」

「間違いありません。あの村で胡服こふくを着ている娘なんぞ、宋雪華しかおりやせんぜ」

それはそうだろう。太原府のような大きな城郭まちなら、たまに胡服を着た娘を見かけるが、村となると胡人の娘以外まず見かけない。動きやすく、馬に乗るのに都合がいいということで胡服を着ているらしいが、それだけではないと魯權はふんでいた。あの娘は飛鏢の名手と聞いている。胡服は飛鏢を打ちやすいのだろう。喰えない娘だ。

「なるほど」

「娘の横には黒んぼの大男もいた。この二人が仲よく遼将と話してたんだぜ。何かを手伝うだのどうだのって」

魯權は衝撃を受けた。遼の將軍が絡んでいるだと。軍との取引は、参入こそ難しいが、一度ははじめれば利は大きい。それによほどのことがない限り、取引先を替えることもない。あの娘に入られたら。魯權は、事態が切迫しているのを感じた。

「ほう、商いのことでも話してたのでしょかな」

魯權は努めて冷静に言った。

「どうもそんな感じじゃなかったな。はっきりは聞き取れなかったが、女真がどうのこうのって言ってたようですぜ」

「そうですか。それ以上のことは分からないのですね」

「まあそういうことで。けど、魯大尽にとつちや見過ごせない話だと思ひまして」

「分かりました」

魯權はもう一度後ろを振り向き、小者に指示を出した。小者が戻り、李吉に小粒銀を渡した。李吉は小躍りしながら門を抜けて行った。下卑た男だ。魯權は心の中で罵った。

「どう思う、丁洪」

前に顔を向けたまま、魯權が訊いた。

「早急に手をうちませんと」

「そうだな、ぐずぐずしてはおれぬ。奴らが遼軍との取引をはじめる前に何とかしなくては」

「ですが、話の中身がはっきり見えてはおりません」

「丁洪、話の中身などはな、いくらでも創ることが出来るのだ。肝心なことはな、あの娘が遼の將軍に会っていたということなのだ。遼の商人ではなく、遼將とな」

魯權はにやりと口を歪めた。

「おお、魯員外久しぶりですな」

「無沙汰しておりました。知府様※も、御機嫌麗しく何よりでございます」

※知府 府の知事

黄文炳は締まりのない巨体を大儀そうに持ち上げ、魯權に登を勧めた。相変わらず、饅えた臭いを香でごまかしているだけの俗物だ。魯權はそう思った。しかし、太原府で商いをするには、知府との繋がりは大切だった。

「こんな遅くに魯員外※がみえられるとは、何か面倒なことでもありましたかな」

※員外 金持ち、名士

黄文炳は酒臭い息を吐きながら、それでも見かけだけは心配そうに魯權に尋ねた。

「いえいえ、けしてそのようなことは。何しろこの太原府は、知府様の御威光で平穩そのものでございます。おかげをもちまして、私ら商人も安心して商いをさせていただいております」

「では一体、何の用ですか。もう、二更※になろうとしておるが」

蠟燭の灯が、紅色の玻璃※を透かせて妖しく揺れている。魯權はその灯に照らされながら、黄文炳の肥満した身体を見つめていた。

「知府様の貴重なお時間を騒がせまして、まことに申しわけございません。ですが、重大な情報を手に入れましたので、夜分とは思いますが、こうして参上した次第です」

※二更 夜十時頃 ※玻璃 ガラス

黄文炳は少し驚いたような顔をした。いつもなら、魯權はこんな遅くには来ない。役所の終わる頃にこっそりと来て、何がしかの付け届けを置いていくだけだった。それは決して少ないものではなく、太原府一の大商人として十分なものだった。しかし、個人的なつきあいとしては深いものではなかったはずだ。

「魯員外がそう言うなら、聞かねばなりませんな。何か重大な事態でも起こりましたか」

「起こってしまったのなら、私が知府様に申し上げることもございません。起こらぬようにするために、私は迷惑と知りつつこうしてお騒がせしているのです」

「それはありがたい。で、いかなることですか」

「管轄の宋家村で怪しい動きがあると」

「宋家村・・・ああ、死んだ保正の娘が村の復興に励んでいるとか聞いたが。何かおかしなことでもありましたか」

「その娘、宋雪華というのですが、これが昨日、遼の將軍と何やら密談していたとのこと」

黄文炳は驚いた。遼の商人に会うのなら分かる。遼の商人も宋の商人も互いに行き来する。もちろん、正規の通行証を持ってだ。まして、遼の商人の多くは漢人だった。宋に来てても違和感はない。しかし、軍人となると話は別だ。ただの兵卒でさえ国境侵犯になる。まして將軍となればただでは済まされない。何らかの意図があつての侵入と受け取られても仕方がないだろう。いや、実際何か企みがなければそんな危ない橋は渡らない。いかに国境地域の治安が乱れているといっても、それは民や末端の兵の話だ。

「ゆゆしき事態ですな。ただの挨拶とは、とても思えん」

黄文炳が唸るように言った。

「何の意図もなく宋家村に來たとは思えません。それを目撃した者は、太原府がどうのと話していたとか。最近賊の動きも活発になっておりますし、遼兵の侵入も増えております。太原府は遼から見ると遠くはなく、国境を守る代州の防衛は脆弱です」

魯權は、李吉が話していないことまで付け足した。話の中身などどうにでもなる。要は、宋雪華が遼の將軍と会っていたという外形があればいいのだ。

「そういえば二年前、河間府が遼兵に襲われたことがあったな。あの時は、幸い禁軍駐屯部隊が近くにいて、大きな被害を出さずにすんだ

と聞いたが。もしも宋家村が手引きをするととなると、ただではすみそ
うにないな」

「知府様の御明察通りと思われれます。あの宋雪華という娘は、私ら真
面目な商人を目の敵かたきにして、いつも商売の邪魔ばかりしております。
そのうえ、以前遼兵に村を襲われたというのに遼と交易し、仲間の一
部は遼の権場に常駐しているとのことです。勘ぐれば、遼兵に襲われ
たというのもあの娘の手引きによるものかもしれません」

「だが、父親の保正も死んでいるのだろう」

「あの娘なら、そのくらいは平気でしょうな」

「魯員外は会ったことがおありか」

「ついこの間。あの者達があまりに商いの道から外れておりましたの
で、私が諭さとしに行ったのです」

「魯員外の方からか。それで、聞き分けたのですかな」

「聞く耳持たぬというところでした。とても話の通じる相手ではあり
ません」

「とすると、放っておくわけにはいかんな」

「その通りですぞ、知府様。災いの芽は、早く摘むことが肝要でござ
います」

「分かった。明日都頭ととを宋家村に遣ろう。そして、こちらで厳しく詮
議してみよう」

「それが宜しいかと。ただあの娘には、いつも付き添っている無用な
る男がおります。こ奴に知れると厄介かと。私の方で策を考えておき
ますので、都頭様にお含みおきを」

「よいですな。都頭には、魯員外の指示に従うように言っておきます」
「御配慮に感謝いたします」

魯權は、ことがうまくはこんだことに満足した。これであの邪魔な
娘を葬ることが出来る。そうほくそ笑みながら、魯權は丁洪の待つ門
外へと急いだ。

丁洪は、所在なげに宮城の門扉に寄りかかっていたが、魯權を認め
ると慌てて走り寄って来た。

「うまくいったぞ」

「そうですか」

「後は、どうやってあの娘を一人にさせるかだ」

「私にいい考えがあります。御主人様は心配なさらなくてください。誰が宋家村に行くのですか」

「都頭※を遣るそうだ」

※都頭 廂軍の指揮官。土兵五百ほどを率いる

「知府の子飼いとすると袁偉えんいですな。分かりました。うまくいくと思います。私も、袁偉とともに宋家村に行きます」

「行ってくれるか」

「それより、先にしなければならぬことがあります」

「何だ」

「曹瑛です。あの娘に気づかれると厄介なことになりましょう。あらかじめ押さえておいた方が無難かと」

「そうだな。どうせ捕らえることになるのだからな」

「屋敷で屯たむろしている食客を使いましょう」

「分かった。明日早朝に捕らえに行かせよう」

魯權と丁洪は頷き合い、堤燈ちようちんの光に照らされながら不気味に笑い続けていた。

「嬢さん、ちいと石勇のところに行ってくる」

春の柔らかな陽射しを破って、無用の大声が館の中に響き渡った。

「おやおや、ようやく石勇を仕込む気になったのですね」

雪華は残月の鬢たてがみを梳すきながら、嬉しそうな声を上げた。残月も気持ちよさそうに雪華に身を任せている。地面からゆらゆらと蒸気が昇るほどの暖かな陽だった。

「そんな大仰おおきようなことではないんですが、あいつ、昨日のことでおちこんどるんじゃないかと思いましたが」

「わたしから頼もうと思っていたところですよ。どうも最近、わたしを避けているようですし」

「嬢さんをですか。あいつ、色気でもついてきたのかな」

「馬鹿なことを。とにかく、様子を見て来てください」

「そうですね。行ってみませんか」

「頼みましたよ」

無用は小さく頷くと、門を出て北の道を歩いて行った。代州へと続く道だった。母の死後、石勇は村の北端に小屋を建てて住み着いている。そこからは代州への道が見渡せ、まるで北からの侵入者を見張っているかのようなだった。

一刻もせず、無用は石勇の小屋に着いた。

「おるか、石勇」

返事はなかった。無用はとりあえず小屋の周りを調べてみた。小屋の中に人の気配がある。

「おい、石勇。儂に居留守を使うのか」

無用はいきなり戸を開けた。

小屋の隅の薄暗がりの中で、石勇が座っていた。膝をかかえ、虚ろな目で無用を見上げている。無用の胸に怒りが湧き上がってきた。

「おまえ、何をしておるんだ。皆が頑張っておるといふのに」

無用は怒鳴るように石勇に言った。

「俺は……弱いのか」

無用には答えず、ぼそりと石勇がつぶやいた。

「おまえ、何を言っておるんだ」

「俺はあいつに負けた」

「呉乞買うきまいにか。それは仕方がないじゃろう。あいつは強い。おそらく阿骨打あくだと同じくらいにな。だがな、強ければいってもんじゃやない。人を殺すのが仕事の軍人より、食べる物を作ってくれる農民の方が、儂にはありがたく思えるがな」

「だけど、村の皆は殺された」

「それはそうじゃが・・・」

「あの時、宋江様は十人も賊を倒した。俺達にその半分でも力があつたら、あんなことにはならなかった」

無用は、かけるべき言葉が見つからなかった。石勇は石勇なりに苦しんできたのだろう。

「今さらそんなことを言っても、死んだ者は戻って来やせん。それより死んだ者の分まで生きていくのが、せめてもの供養じゃと思うがな」
「それは分かってるんだ」

「分かっておるようには見えんが」

石勇の隣に、鉄棒が立てかけられていた。一人で鉄棒を振り回していたのだろう。一丈※ほどの長さだが、五十斤※近く※の重さはありそうだ。石勇の力があつてこそ使える武器と言えよう。

「石勇、もしおまえに十分な力があつたとして、賊の襲撃を防げたと
思うか」
※一丈 約二メートル二十センチ ※一斤 約七百グラム

「宋江様と同じくらいに強かったら。雪華姉ちゃんもいたし」

「そうか、儂はそうは思わんがな」

「どうしてだ。一人十人ずつ倒せばやつつけられたじゃないか」

「どうやってだ。最初の一人は不意を衝けば倒せるじやろう。だが、次からの敵は身構えるぞ。よほど力の差がない限り、素早く敵を倒すことは出来ん。おまえが対峙している間に、他の賊が村人を襲うかも知れんぞ」

「それは……」

「いいか、どれほど優れた武を身につけていようと、瞬時に十人もの敵を倒すなどというのは至難の技じゃ。それに敵は、黙って突っ立っておるわけでもない。敵かたわんと分かつたら逃げもするし弱い者を盾にしたりもする。そうなつたら、おまえは一人の敵しか相手に出来なくなる。その間、残った敵がぼんやり見ているとでも思うか」

石勇は答えず、ただ黙って無用の言葉に耳を傾けていた。少しずつではあつたが、かたくなに凝り固まった石勇の心に変化が生じつつあることを、無用は感じていた。

「村が襲われた時のことは知らん。だが、想像することは出来る。嬢さんからも、聞起達からも、そして村の者達からも聞いておる。だから儂にも、ある程度のことは分かる。いいか石勇、あの時死人を出さ

ずにすんだ道は三つしかなかったのだ。一つは、保正と嬢さんとおまえとで、一瞬のうちに賊全員を殺しつくすことだ。もう一つは、村人全員が賊よりも強く、賊を一網打尽にすることだ。そして最後の一つは、賊の襲撃を事前に察知し、罾を設けて賊の侵入を阻むことだ」

無用は一気に捲くし立てた。そう言った後、自分がいればと痛切に思った。

「はじめの二つはどう考えても無理だ。戦えた者は保正と嬢さんだけだ。いくら力が強いといっても、おまえはまだ子供だった。だらしない大人ならまだしも、相手は兵士だ。それも遼のな。一人で宋兵二人分とっていい。村人すべてが、賊を上回る武を持つなぞということ、もっと無理な話だ。だから石勇、最後の一つしかないのだ。賊に侵入されてからではなく、賊に侵入されないようにするしかないのだ。おまえだって、ここに小屋を建てたのは、遼からの賊を見張っておるためだろう。この村の西と南には、汾水が蛇行して天然の守りになっておる。まあ、そのことが隙を生んだとも言えるがな。東には太原府という大きな城郭がある。侵入されやすいのは北だけじゃ。だから、おまえのしていることは悪くない。だがな、おまえ一人で賊に立ち向かうなぞ無理な話だ。せつかくここにこうしておるのだから、賊の到来を知ったら、すぐさま村に報せるだけでよいのだ。ここには、急を報せる鐘もないではないか。おまえ一人で賊に立ち向かって、やられたら誰が村に報せるのだ。そんなことになったら、また前と同じ悲劇を繰り返すだけではないか」

「五年前……」

うなだれていた石勇が、無用の顔を見上げて言った。

「一人で百人の兵を倒した奴がいた。たった半刻で」

無用は、一瞬複雑な表情をした。

「黒旋風という綽名の奴だ。そういえば無用のおっさん、あんた、噂に聞く黒旋風にちよつと似てるな。黒くて大男だし」

「馬鹿を言うな。黒くて大きいだけなら、牛だって黒旋風になるわい」
「けど、黒旋風は三年前突然姿を消したって聞いている。おっさんが村

に來たのも三年前だったよな」

「そんな奴がどうしてこの村におるんじや」

「それもそうだよな。銅堤山どうていざんを根城に、二・三百もの男達を従えて、
廂軍や悪辣な官吏を襲って名を馳せたあの黒旋風が、こんなちっぽけ
な村に來るわけないものな」

「おまえは、そ奴のことをどう思っておる」

「俺も黒旋風のように強くなりたい。尊敬してるんだ。奪った食料や
財物を、困ってる人達に分け与えたっていうじゃないか。男の中の漢おとこ
だ」

「そうか、そんなふうに思っておるのか。まあいい。石勇、そんなに
強くなりたいのなら、俺が力を貸そう」

「おっさんがか」

「そうだ。俺は黒旋風ほどではないが、遼兵の五人くらいなら一人で
片付けられるぞ」

「そんなこと知ってるさ。昨日だって、あつという間に遼兵二人を叩
きのめしたじゃないか。あいつら、遼兵の中では結構強い方だと思う
ぜ。黒旋風には及ばないだろうけど、おっさんが強いのは認める」

「それなら明日から館に來い。未牌びはい※から四刻、おまえの武をみてや
ろう」

※未牌 午後二時頃

「ああ……ありがたいんだが、館に行くのは……」

「どうした、不都合でもあるのか」

「俺が館に行ってる間、ここの見張りは……」

「何だそんなことか。心配するな。見張りはおまえでなくとも出来る。
村の者に俺から言っておく」

「そんなら大丈夫だ。無用のおっさん、宜しく頼みます。俺を役に立
つ男にしてほしい。このままじゃ、雪華姉ちゃんに見放されてしまう」
「分かった」

無用の返事は、その一言だけだった。